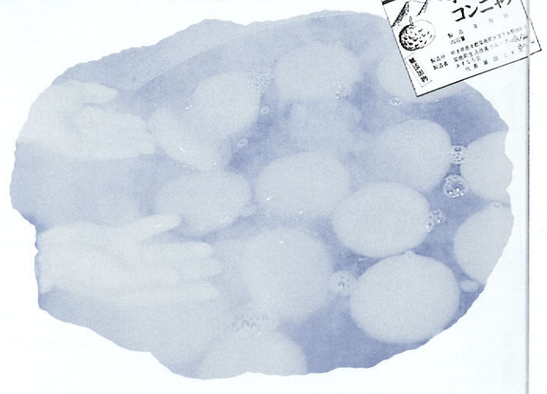
噂の町をズームアップ

毎日に張り、明日に手ごたえ。すすめ、健康発進基地。

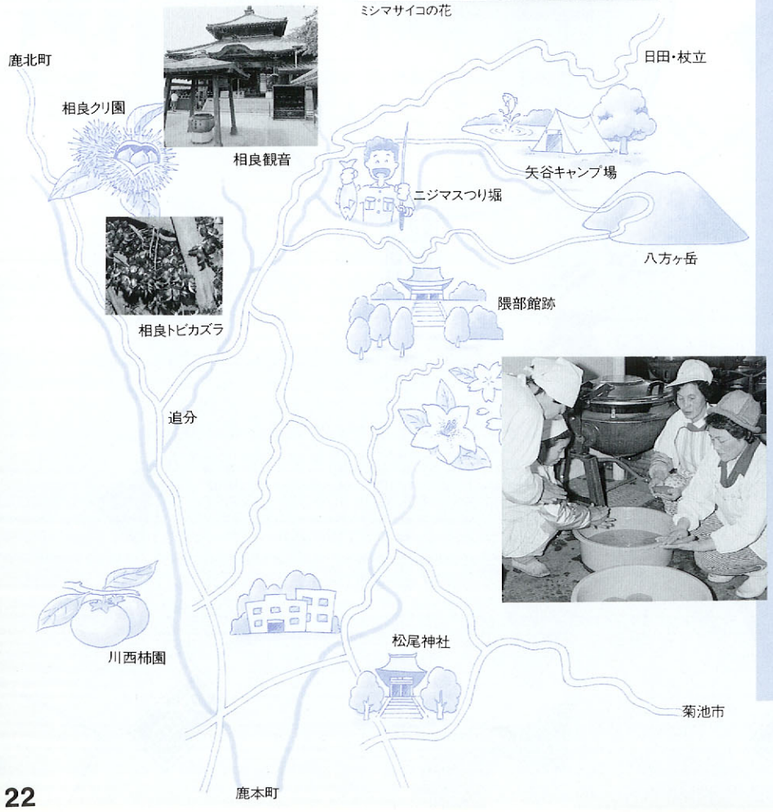
薬草の里を訪ねて

菊鹿町——ハーブカントリー健康邑（むら）

天台宗比叡山延暦寺の末寺"相良観音"、
近くの国指定天然記念物"アイラトビカズラ"、八方ヶ岳と
国見山に南北を囲まれた"矢谷渓谷"などで知られている菊鹿町。
今、この町がちょっとした注目を集めています。薬草、こんにゃく
そしてヘチマ——もちろんまだまだこれからのものばかり。
でも、確実に進んでいる足音が感じられます。
この三つのテーマで菊鹿町の地域づくりをご案内します。



ミシマサイコの花



こんにゃくづくりに見る、もう一つの青春。これからの地域づくりは、「女性の時代」。ウーマンパワーでマチをしっかりささえます。

昭和59年、町の生活改善グループのメンバー7名でグループ"あすなろ会"が発足。当初は「学校給食に地場産のものを使えないだろうか…」という町からの話もあり、思いついたのがこんにゃくづくり。町の協力もあって翌年には加工所が完成。今では学校給食はもちろん、近くのスーパーや菊池方面の旅館、その味を知った遠方の人からも注文が来ています。「何せ手作りだから限度があるんですよ」それでも7人そろう時には、1日800～1,000個を作りあげるといいます。もちろん配達も自分たちで。

この日は北海道へ送るというこんにゃくが作られていました。一つ一つの作業に愛情がいっぱいこめられています。おいしいはず。

「やろうときめたらあとにはひけません。負けちゃおれんです。」力強い言葉もとび出します。もちろんこれまでできたのもメンバーの家族の理解、協力があってのこと。ゆでるときのかまもご主人さんたちの手作りとは恐れ入りました。

「毎日の生活に張りがあります。みんなでガヤガヤ言いながら、研究し合っています。地元のいも生産者にも喜ばれるのがうれしい。それになんといっても、"菊鹿町においしいこんにゃくがある"と言われるだけで大満足。」と、代表者の冨田ミキヨさん。

「足もとに素材があるんじゃないでしょうか」——自分たちの地域を見る目、知恵、地道ながら確実に歩を進めるエネルギーとパワー。感動です。ところでこのグループが順調に行っている秘けつを。「損得を考えずにやっていくこと。ほんとうにやりとげたいという熱意。メンバー7人こころは一つですよ。」

がんばれ！"あすなろ会"。

町ぐるみ健康邑（むら）に。ユニークな町づくりの芽は着々と伸びています。「薬草の里づくり」。

ミシマサイコに代表される薬草、今、菊鹿町では県内産の7割～8割が生産されています。以前から少し植え付けがなされていたようですが、町が試験的に取り組んだのが昭和58年。もともとは減反を含めた畑地の有効利用から考えられたもの。当初は30アールぐらいだったとのことです。そして2年後には本格的に導入、「菊鹿町薬草振興会」も誕生。現在は7ヘクタールを超え、会員も76人。振興会発足当初からのリーダー、有働勝義会長は力をこめて語られます。「もっともっと増やしていきたい。いまから一生けんめいやればどんどん伸びますよ。将来は安定した産物に育てたいですね。」

これまでにない、薬草という作物、みなさん途惑いもあったのでは。

「新しい取り組みですからね。勉強しましたよ。先進地から先生をお招きしたり、視察に行ったり。それにそれぞれの体験をもとに発表会もやりました。仲間は50代、60代がほとんど、なかには70代の人も。年寄りの生きがいですね。」

まだまだ課題もたくさんあります。まず薬草を定着させるための土づくり、うまく発芽させる技術の研究、将来の大量生産へ向けての機械化の検討……。

「将来は若者も安心して取り組める特産品にしたいですね。そして、町民みんなが自家製の薬品をつくる、となりませんかね。」

有働さんの話も夢ではありません。健康邑づくりというユニークな町づくりを進める菊鹿町、薬草の今後が大いに楽しみです。

たかがヘチマ、されどヘチマ。菊鹿ブランドを全国へ。夢が広がる「ヘチマ物語」。

適当な硬さと独特の肌ざわり。ヘチマといえば背中洗いを連想するのですが、考えれば次々と楽しいアイデアがいっぱい。天然の通気性をもつヘチマ帽子、香りのいいハーブを詰めたヘチマ製まくらカバー、乾布まさつ用ヘチマ、靴の中敷き、コースター、マット、スリッパ、アクセサリー小物から果てはベストまで——この、素材から商品化までを町をあげて取り組もうという"ヘチマ計画"が菊鹿町でスタートしました。

そもそもこのヘチマ、「米に変わるものはないか」というところから出発。昭和61年の春、相良（れいら）地区を中心に植え付けが始まった。

「当初は町出身の食品メーカー社長の肝入りで、ヘチマ水（ヘチマコロン）をとる目的だったんですが、途中、実のいいものが出来ましてね。」と今ではヘチマ生産研究会を名のる内古閑研一会長も実に楽しそう。翌年は、実を採る目的で植え付け方法もさらに検討されました。実質的にはまだやっと1年生、はじまったばかりなのに、早くもデザイナーの手で次々に製品化がなされ、舞台は東京へ。昨年11月には六本木、銀座で展示会、商談会の開催。すでに大手の流通業者から大量の素材注文もでてきました。

町の特産品として素材生産から製造までできれば、転作作物の柱となり雇用の場の拡大にもなり、なんといっても町の活性化の起爆剤になります。

「まず、作付面積の拡大です。それに生産者の確保。製造へ向けての体制づくりも考えなければなりません。」

そして内古閑会長は、「薬草で体内、ヘチマで体外の健康管理を。そして、健康発進基地菊鹿町へ——。」とここでも夢は大きく楽しい。

菊鹿町のヘチマ物語——今後の展開が期待されます。